

# 教育長は

# こう考える

## 比嘉隆沖縄県久米島町教育長に聞く 「島留学」で高校活性化を

沖縄県久米島の唯一の高校である県立久米島高校の園芸科が、入学者数の減少を受け、廃科の瀬戸際にある。入学者数を増やさなければ、島全体が衰退するとの懸念から、町全体が危機感を抱いている。少子化により、島の子どもたちに呼び掛けるだけでは限界があることから、昨年度初めて島外からの入学者を積極的に募集。里親制度を設けるなど町民の協力の下、初回の今年度は5人の「留学生」を迎えた。県立高校を町が支援する異例の策を採る、久米島町の比嘉隆教育長に話を聞いた。

### 町全体が危機意識共有

「留学生」募集に踏み切ったきっかけは、久米島高校の定員は、1学年120人だが、2004年度から定員割れが続いている。特に深刻なのは園芸科で、県は定員(40人)の半分を割れば廃科との方針を示していた。

07年度からの入学者数は、2年連続で15人。09年度にはわずか9人にまで減り、同年4月、次年度の園芸科の募集を停止すると県から通告があった。



インタビューに答える比嘉教育長

園芸科の入学者が少なく、大変厳しい状況との認識は学校側も持っていたが、県から指摘されてだいぶ慌てた。町民5800人分の署名を持参して沖縄本島まで足を運び、県教育長と県議会議員に園芸科の存続を要請した。その結果、町として対策を講じることを条件に、期限なしの猶予期間を頂いた。それを受けて入学者数を増やす取り組みを行うことになった。

久米島町内の全中学校の卒業生は、毎年80〜90人で、そのうち2、3割は島外の高校に進学する。町内の卒業生だけでは120人の定員が満たせないで、島外の子どもたちが久米島高に入れるような手だてをしようということになった。

町民の反応は、園芸科の廃止が告げられた09年度には、署名運動が起こった。また、11年の県立高校編成整備計画で再び園芸科廃科の方針が示されると、廃科に反対する町民決起大会が開かれた。人口減少という課題が、町民全体に共有されていたからこそ、このような行動につながった。

人口減少に歯止めをかけるには、雇用の確保が喫緊の課題。園芸科が廃科になれば、島の農業も衰退する。農業が衰退すれば、雇用の受け皿も減ってしまう。県の調査では、園芸科の卒業生の進路が久米島町内の農業ではなく、沖縄本島への各分野への就職であることが分かった。それについても町内でさまざまな意見交換を重ねたが、やはり久米島は農業が主体。基幹産業を衰退させてはならないという意見が相次いだ。

島外から入学者を募集するには、それなりの準備が必要。税金を使ってその受け入れ準備をするので、町民の皆さんには説明をしてきたし、これからはするつもりだ。

### 美しい自然や最先端技術で魅力高める

入学者数増加の力ぎは。

魅力ある学校づくりで、高校を活性化させること。魅力としてまず挙げられるのは、島の自然。

島の面積の4・3%を占める島北西部の湿地帯は、08年にラムサール条約に登録された。また、町内離島の硫黄島を除く久米島全体が、1983年に沖縄県で第一号の自然公園に指定されている。そのような久米島の自然や環境を、広く島外の中学卒業生にPRしたい。

最先端技術が身近にあるのも大きな魅力。2000年に開所した沖縄県海洋深層水研究所では、13年に海洋温度差発電実証設備が完成した。実際に発電を行っている施設としては世界で唯一。今年11月からは国の補助金を活用し、衛星を利用した無人カーの実証実験を行う予定だ。

「島に誇りを、心に夢を」が島のキャッチフレーズ。子どもたちが将来島に戻ってきた時、最先端技術の分野で活躍できるような環境を整えたい。

高校生活での魅力は、姉妹校であるハワイ島コナワエナ高校との交流を行っている。13年度は8、9月の約2週間、久米島高から3人の生徒を派遣した。英語の習得のほか、体験入学で産業や文化についても学んだ。さらに、現地の県人会との交流を通して、これまで意識しなかった久米島の良さを感じてもらった。同年11月にはコナワエナ高から3人を久米島に呼び、沖縄の歴史や久米島の文化を学んでもらった。学習面では、13年に全島で「WiFi-Fi(ワイファイ、無線通信)」が使えるようになったので、各学校にタブレットをさらに導入し、学習に最大

限活用したい。

ただ、成績面では大変厳しい状況だ。全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)で、6年連続総合最下位の沖縄県の中でも、久米島町の平均は、県平均を下回る。中高一貫教育により試験を受けなくても高校に入学できるようになってしまったのが、成績低下の要因の一つ。しかし、仮に中高一貫教育の制度を廃止しても久米島高は定員割れ。学力レベルをどう保つかが課題だ。

### 受け入れ体制の整備を

島留学の課題は。

里親の確保が進まない。校長らと数人で町内の家庭を回ったが、大変厳しい状況だった。前例がないこともあり、町民は学生を預かることの責任を心配していた。「万一、何かあったときには」「育ち盛りの子どもは何を食べるのか」など、さまざまな不安がある。初めてのことなので不安があるのは当然だし、今までやったことのないことをやるのは大変な一歩。その一歩を踏み出したい。

初年度の今年度は、5人の「留学生」のうち1人は町内に親戚がいたので、里親としては4世帯に引き受けていただいた。より多くの里親を確保したいが、自ら町内を回った経験から、他に受け入れてくれる人を探すのは恐らく厳しい。「引き受けて大丈夫」ということを、今の里親の皆さんが、広くPRしてくれたいことを期待している。

ただ、今年の在籍数は定員360人に対し233人。あと130人弱を島外からというのは

大変な数字。里親の確保もそうだが、町の財政的な問題もある。

現在は1人の里親につき、町から2万円を助成している。今は4人だが、これが30人になると1カ月で60万円、年間で720万円にも上る。高校が存続し、子どもたちの育成を考えると、それほど高いものではないかという感じもするが、かなり厳しい。町がどこまで里親制度を確立させて人材育成に支援できるかは私たちの大きな課題だ。

里親以外の策は、町として、独自の寮を整備すれば、より多くの入学生を島外から受け入れられる。視察した島根県立隠岐島前高校は、県立の寮が整備されていた。週末になると里親のお宅で子どもを預かってもらうシステムもなっている。

久米島は県の寮もないし、沖縄県立高校の場合、県外からの受験者については、里親と同居するのが前提。県に規制の緩和を再三要請しているが、県全体の話になるので大変厳しいという答えだ。どこまでできるか全く未知数だが、やらなければ次の一歩が見えてこないで、今が頑張るところだと思っている。

【横顔】1956年久米島町生まれ。79年旧具志川村役場入庁。2006年に町教育長に就任。趣味は社交ダンスと陸上競技。町内のスポーツ行事への参加は「公務員の一つの役目」として、短距離と跳躍で臨む。(平原紀子 那覇支局)

http://www.jiji.com